

夏に向かって(豚と水・給水器のメンテナンスを)

桜の花が終わると、日脳のワクチンを考える方が多いと思います。春が来たら夏の準備をしないとすぐに暑い季節がやってきます。昨年の猛暑は大変でした。長期予報では今年はあまり暑くならないと言っているようですが、予報通りになるとは限りません。なるべく早く暑さに備えましょう。

夏の準備には色々ありますが、水の管理は大変重要です。家畜を飼育するのに必要なものは、餌と水と空気に集約されます。豚は特に水と仲の良い動物です。西遊記に出てくる猪八戒は天の川をつかさどる天蓬元帥だった、というも豚と水の関係を物語っています。哺乳動物の体は2/3が水からできています。水の少ない環境で生きていける動物は貴重な水を体外に出さないために、大変濃い尿をします(猫などが良い例です)。一方、豚は水の豊富な所で暮らすので、薄い尿を沢山します。沢山の水を飲まないで生きていけない動物なのです。

ところで、我々人間は水をどの位消費するのでしょうか? 飲む量は平均すると1日1.5L以下だそうですが、使用する量は240Lだそうです。飲むよりも炊事、洗濯や水洗トイレで多量の水を使っているのでしょうか。豚は豚舎の洗浄水を含めて母豚1頭当たり1日100Lが必要と言われています。豚が1日に飲む量は平均で

体重 15kgまで	1.2L	体重 60kg以上	6.0L
30kgまで	2.25L	妊娠豚	8.0L
60kgまで	5.0L	授乳豚	20 L 以上

という資料がありました。人間の1日1.5Lと比べると大変な量です。

現代の養豚産業では豚は豚房に押し込められ、自分で餌や水を探すことはできません。人間が豚にとって必要な、餌と水(質の良い空気も)をちゃんと与えることが豚の管理の基本です。ドライフードを与えている豚は水が無いと食べなくなることはご存知でしょう。水が不足すると食べる量が減り、そのために発育が遅れます。水を与えるのに様々な方法が考案されています。半割土管のような餌箱兼用の飼槽に水を溜める方法、カップ型、給水器と餌箱を組み合わせたウエットフィーダー、最近では水と餌を混合したりキッドフィーディングも普及してきました。これらは、効率よく手間をかけずに豚を飼うために考案されたもので、それぞれ一長一短があります。使用する給水器によって肉豚の発育に大きな影響があるという報告もあります。共通しているのは飲料水を豚が必要な時に必要な量を適正な流量で与えることです。そのために、点検整備が欠かせませんが、案外設置したままで問題が起きてから対処しているのが現状ではないでしょうか? カップ式ではカップに糞が溜り、飲めなくなることがあります。特に問題が多いのはニップル式の給水器です。構造が簡単な分メンテナンスが必要です。昔、ピットの無いコンクリートたたきの豚舎の頃は、毎日スコップを持って豚房の掃除をし、新人はベテランの方に給水器のチェックを忘れないよう厳しく指導されたものです。最近のピットの完備した豚舎では、1人当たりの飼育頭数が増え、忙しくなったことと防疫上の理由もあるのですが、豚房に入る機会が少なくなっているようです。ぜひ給水器に注意をしてください。

授乳中の母豚は特に沢山の水が必要です。1日24回授乳、1頭1回100mL飲むとして10頭哺乳していると10頭×100mL×24回=24Lが1日の乳量です。離乳間際には150mL位は飲みますし、最近の多産系では12頭以上離乳しますから、12頭×150mL×24回=43.2Lという大変な量になります。

見ただけではわからないのは水の出る量です。特にピッカーはどのくらい出ているか判りません。

離乳直後の子豚が強い水圧で吹き出す水で飲めずに困っていることもありました。出る水の量を調整することが必要です。また、水の出し方が分からずにピッカーの周りをうろろしていることもありました。離乳間もない子豚にはカップ式を併設するか、しばらくの間ピッカーに何かはさんで少しずつ水が漏れるようにしてあげましょう。定期的にピッカーを押して出る量をはかり、調整することが大事ですが、最小限やって頂きたいことは、豚舎を空にして洗った後、次の豚を入れる前に全てのピッカーから出る水の量を調べることです。特に分娩舎で母豚に十分な量の水を与えないと、母豚の体液のバランスが崩れ白子、死産が増え、泌乳量が不足し子豚の発育に影響を与えます。

また、配管のつまりにも注意が必要です。特に沢水など水質が悪い場合は配管の内側に苔や細菌、汚れが溜まって狭くなり十分な量が流れなくなります。母豚は一斉給餌の後に一斉に水を飲みます。その時に水量が足りないと水源に近い豚が流れてくる水を飲んでしまい、末端では水が出ないという事がおきます。空舎時に出来るだけ多くの人で一斉にピッカーを押して調べることをおすすめします。

子豚と親豚では飲むことの出来る流量、必要な水の量が違います。豚の必要とする量の水を豚が飲めるようにすることが大事です。水量は簡単に量ることが出来ます。空き缶やペットボトルの口を切ったもの、もちろん計量カップでも結構です。ピッカーを押して容器に受けて100mL溜まるのに10秒かかれば一分間に600mL出ていることが分かります。慣れてくれば見ただけで推測できるようになるでしょうが、時々、実際に量ることをお勧めします。発育ステージごとの流量の目安は

体重 15kgまで	300mL /分	体重 60kg以上	750 ~ 1,000mL /分
30kgまで	600mL /分	妊娠豚	2,000mL /分
60kgまで	650 ~ 750mL /分	授乳豚	2,000mL /分

を目安にして下さい。哺乳中の子豚は液体のミルクを飲んでいるから水はいらないと考えている方もおられると思いますが、哺乳子豚にも水は必要です。子豚用の給水器を分娩欄に設置しましょう。

水質は大変重要です。水道水を使用している場合以外は定期的な水質検査は必須です。沢水や湧水を使用している養豚場では大腸菌が検出されることが多いように感じます。大腸菌は自然界では動物の消化器の中でしか生き延びられないので、動物の排せつ物が混ざっている証拠です。変えることの出来る水源が無ければ塩素等で殺菌することが必要です。硝酸化合物やミネラルバランスが悪いために生産性を落としている場合もあります。定期的な水質検査を行うことは生産性を維持するために必要です。

(Y.T.)

